

## 2.6 台風の変動<sup>41</sup>

台風の変動の特徴は以下のとおりである。

- 2021年の台風の発生数は22個で、平年より少なかった。
- 台風の発生数に長期変化傾向は見られない。

2021年の台風の発生数は、22個（平年値<sup>42</sup>25.1個）で、平年より少なかった。1990年代後半から2010年代初めにかけて発生数の少ない年が多かったものの、1951～2021年の統計期間では長期変化傾向は見られない（図2.6-1）。2021年の日本への台風の接近数<sup>43</sup>は12個（平年値11.7個）で平年並みで、上陸数<sup>44</sup>は3個（平年値3.0個）だった。接近数は発生数と同様に長期変化傾向は見られない。上陸数は、年あたり2、3個程度とサンプル数が少ないため、長期変化傾向を述べるのは難しい（図2.6-1）。

2021年8月に公表されたIPCC第6次評価報告書第1作業部会報告書において、1980年代以降、カテゴリ4以上<sup>45</sup>（1分間の平均風速58m/s以上；概ね「猛烈な台風（10分間の平均風速54m/s以上）」に相当）の台風が増加している（確信度が中程度）と報告されている。また、北西太平洋域の熱帯低気圧がその強度のピークに達する緯度が北に遷移している可能性が高いとも報告されている。

北西太平洋域における強度の大きい台風に関する長期変化傾向については、最新のIPCC報告書でも確信度の高い評価までには至らなかった課題であり、引き続き、より長期かつ質の高い観測を継続し、それらを活用して長期変化傾向を監視していくことが必要である。

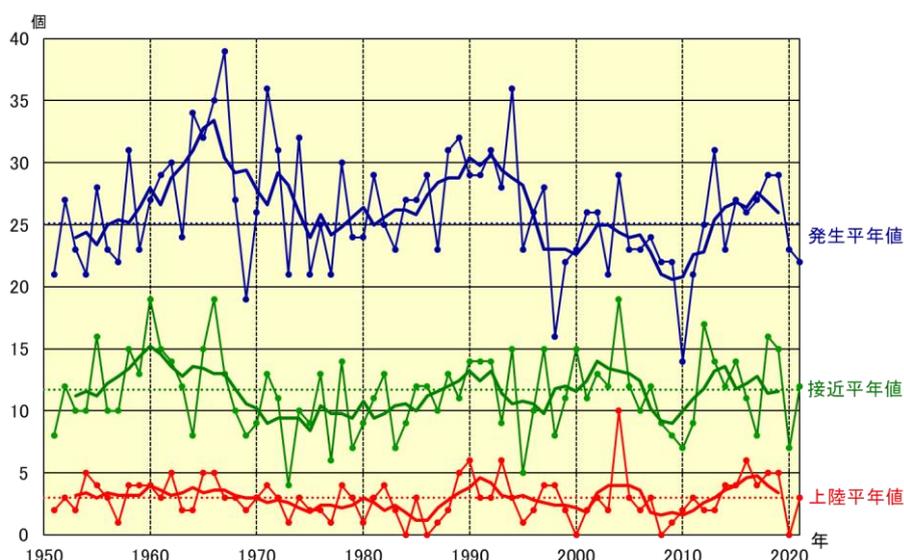


図 2.6-1 台風の発生数、日本への接近数・上陸数の経年変化

青：発生数、緑：接近数、赤：上陸数。細線は各年値、太線は5年移動平均値、点線は平年値（1991～2020年の30年平均値）を示す。

<sup>41</sup> 熱帯または亜熱帯地方で発生する低気圧を熱帯低気圧といい、そのうち北西太平洋または南シナ海に存在し、低気圧域内の最大風速（10分間の平均風速）がおよそ17m/s以上のものを日本では「台風」と呼んでいる。また、台風の最大風速により、勢力を「強い」（33m/s以上44m/s未満）、「非常に強い」（44m/s以上54m/s未満）、「猛烈な」（54m/s以上）と区分している。

気象庁ホームページでは、統計を開始した1951年以降に発生した台風に関する様々な統計資料を掲載している。<https://www.data.jma.go.jp/yoho/typhoon/statistics/index.html>（台風の統計資料）

<sup>42</sup> 平年値は1991～2020年の平均値。

<sup>43</sup> 「接近」は台風が国内のいずれかの気象官署等から300km以内に入った場合を指す。

<sup>44</sup> 「上陸」は台風が北海道、本州、四国、九州の海岸線に達した場合を指す。

<sup>45</sup> 気象庁の分類は10分間の平均風速、ハリケーンのカテゴリは1分間の平均風速に基づく。